

大阪府営東大阪上小阪（第1期）住宅（建て替え）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

上小阪遺跡発掘調査終了報告書

平成14年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

遺 跡 名 称： 新上小阪遺跡

所 在 地： 東大阪市新上小阪町 地内

最終遺構面面積： 1,516 m²

事業契約期間： 平成13年6月1日～平成14年3月29日

調 査 担 当： 中部調査事務所 調査第2係

委 託 機 関： 大阪府建築都市部住宅整備課

遺 跡 種 類： 集落跡・生産遺跡

遺 跡 時 期： 弥生時代～近世

主 要 遺 構： 水田・島畠・掘立柱建物・竪穴住居・井戸・土坑・溝

特 記 事 項： 古代遺構面検出井戸より、墨書土器（「村主」）出土。

はじめに

本調査は、新上小阪遺跡におけるはじめての発掘調査であり、大阪府教育委員会の試掘データや周辺各遺跡の発掘調査データを参考にし、同遺跡内の調査への基本的なデータを提示すべく調査を行った。調査はまず、重機により地表面から約0.9mを掘削し、その後、約3.8mを人力により掘削した。

面の呼称は、機械掘削停止面を第1面とし、第1面を構成する層を第1層、第1層を除去した面が第2面…となる。なお、各層はこの地に供給された自然堆積層（b層）とその上部に様々な要因で形成された土壌化層（a層）を一組とする。b層は、中世以降に堆積した各層にはほとんど見られなかったが、古代以前の各層には見られたため、各遺構面（a層上面）の最終景観としてはあらわれない遺構の検出や地形の把握の為にb面調査も行った。また、作業の都合上全体の調査区を、当初は調査区中央に見られた旧府営住宅に伴うガス管本管による攪乱を境に、攪乱消滅後はY=-37.300ラインを境に東と西に分けて調査を行った。文中で、東半・西半という場合、この区分である。以下では、層序、および人力掘削を行った各検出面の調査概要を記述する。

基本層序

まず、第0層は機械掘削により除去した層をいうこととする。試掘によりおおまかな基本層序は提示されていたものの部分的な試掘調査ではその位置により、とくに中世以降卓越する島島などの凸状遺構が位置的にはずれてしまう可能性が当然ある。大阪府教育委員会による試掘調査も、水田部分に位置したものと考えられ、この部分を参考に機械掘削を行ったため、機械掘削終了段階で第1層から第3層までの各層が露出し、中世段階の島島の上層を機械掘削で削平してしまっている。

第1層は黄褐色極粗砂～細礫混じり砂質シルトで、部分的に2層（第1-1・1-2層）に細分が可能であった。第1-1層はやや白色を呈し、1-2層より極粗砂～細礫を多く含む。いずれも水田部分一部にのみ見られる。

第2層はオリーブ黄～灰オリーブ色極粗砂～細礫混じり砂質シルトで、第1層同様砂礫を多く含むが、第1層より基本的にシルト質である。

第3層は東半では2層に、西半では4層の土壌化層に細分され、特に西半では地形的に低いこともあり、b層が見られる部分もあった。第3-1層は灰黄～にぶい黄色中砂～極粗砂混じり粘質シルトで、砂は2層からの攪拌が及ぶ部分にのみ顕著に見られるのみで、基本的にあまり混じらない。西ほど粘質である。第3-2層は暗灰黄～黄褐色中砂～極粗砂混じり粘質シルトで、第3-1層より砂を多く含む。第3-3層は暗灰黄色の極粗砂～粗砂混じり粘質シルトで調査区西半に広がる層である。第3-4層は灰色の極粗砂～粗砂混じり粘質シルトで調査区西半に広がる部分的な層である。

第4層は褐～灰黄褐色粗砂～細礫混じり粘質シルトで、上層ほどではないが砂礫を含む。この土壌化層を除去すると、調査区全面を覆う洪水堆積層である第4b層が存在する。第4b層はシルト～細礫から成り、複数回の洪水堆積物を一括している。

第5層は黒褐色粗砂混じり粘質シルトだが、西半の一部では層中に極粗砂が見られ、3層に細分が可能であった。この土壌化層を除去すると、調査区全面を覆うの洪水堆積層である第5b層が存在する。第4b層同様、複数回の洪水を一括している。第5b層は第6面段階に東側が地形的に低かった影響から、東側でとくに厚く堆積し、第5面以降の地形は東側が高くなっている。

第6層は黒褐色中～粗砂混じり粘質シルト層で西に行くほど極細砂が混じるようになる。地形的に西

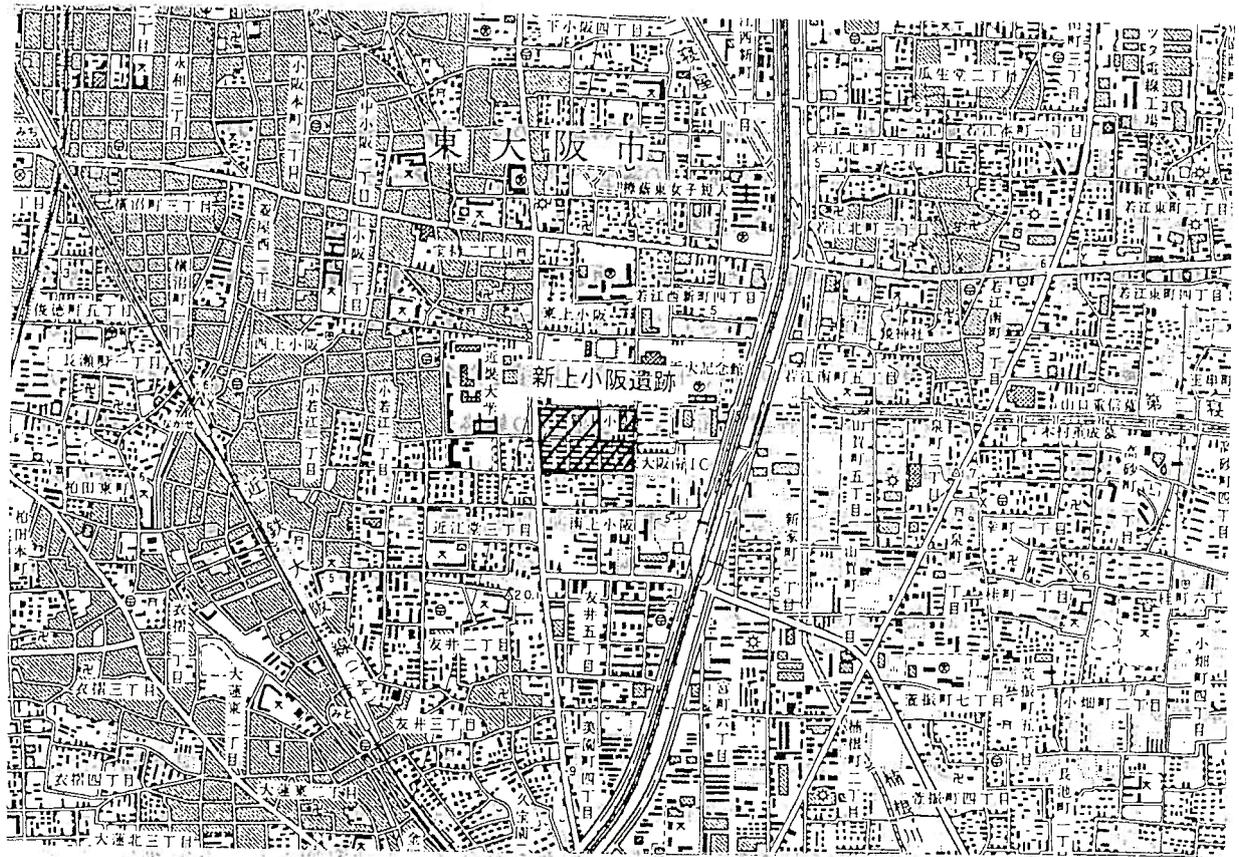


図1 調査位置 (S=1/25,000)

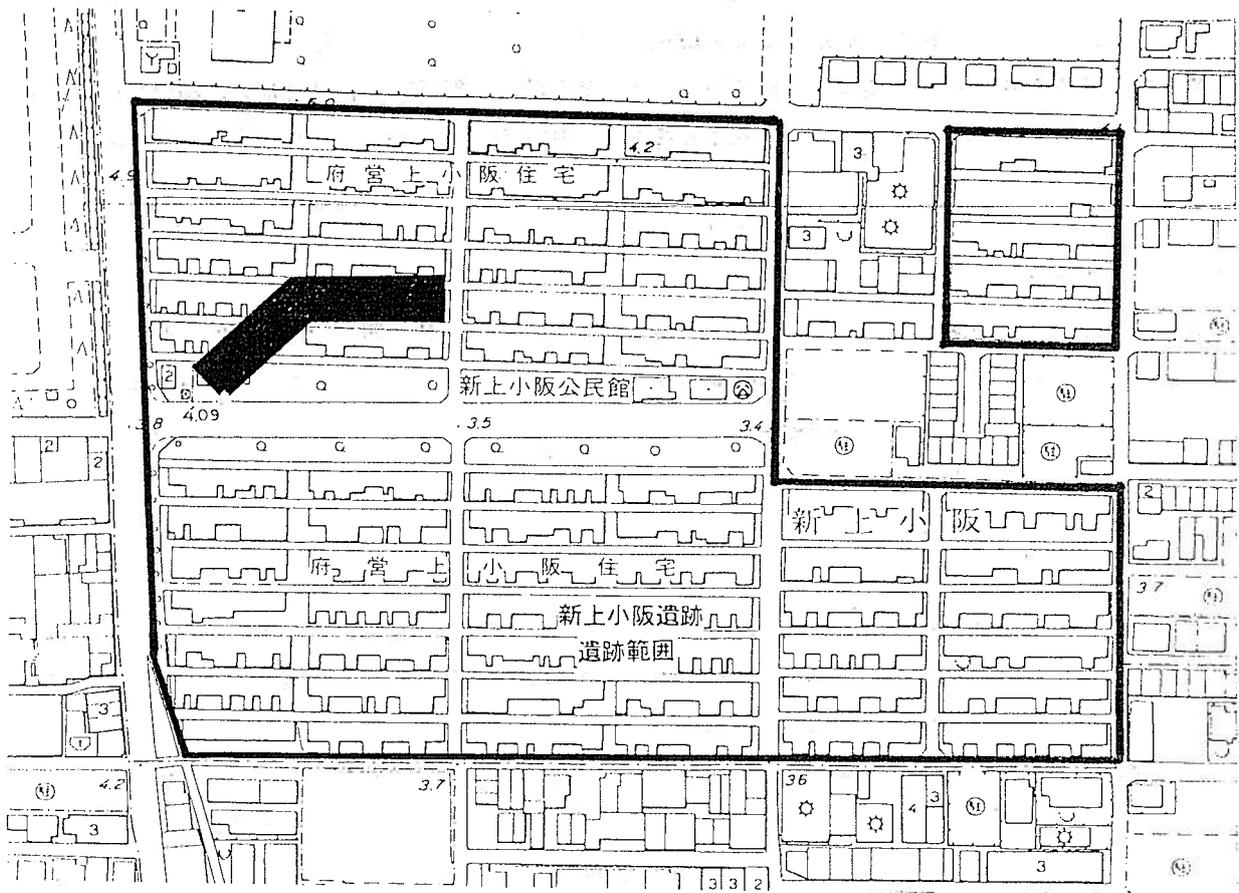


図2 調査区平面 (S=1/2,500)

側が高くこの部分の黒色土壌化層の形成が顕著である。この土壌化層を除去すると、調査区西半を覆う洪水堆積層が存在する。ただし、調査区西半西側は、後述する第 8b 層の堆積が厚く、第 8 面以降の各面が地形的に高く、第 6 層下部には直接後述する第 7 層が連続する部分が見られた。

第 7 層は灰～黒色中～粗砂混じり粘質シルト層で、西側では下層の極細砂を多く攪拌しているため砂質度が強い。この土壌化層を除去すると、調査区全面を覆う洪水堆積層である第 7b 層が存在する。西側では、粘土～シルト・極細砂などの比較的細粒の堆積物であるが、東側はそれに比べ基本的に粗粒の堆積物が主である。

第 8 層はオリブ黒～灰色シルト質粘土であるが、東半と西半で層相が異なる。西半では攪拌を受けた状況でこの第 8 層が見られるものの、東半ではほとんどの部分で攪拌が見られず、植物遺体を横方向に多く含む自然堆積層であった。

第 9 層は黒色シルト質粘土層。ただし、調査区中央部では砂が多く混じり、他部分よりも黒色を呈する。第 10 層との間には b 層を挟まず、第 9 面段階の土壌化の影響で第 10 層の残存が悪い部分がある。

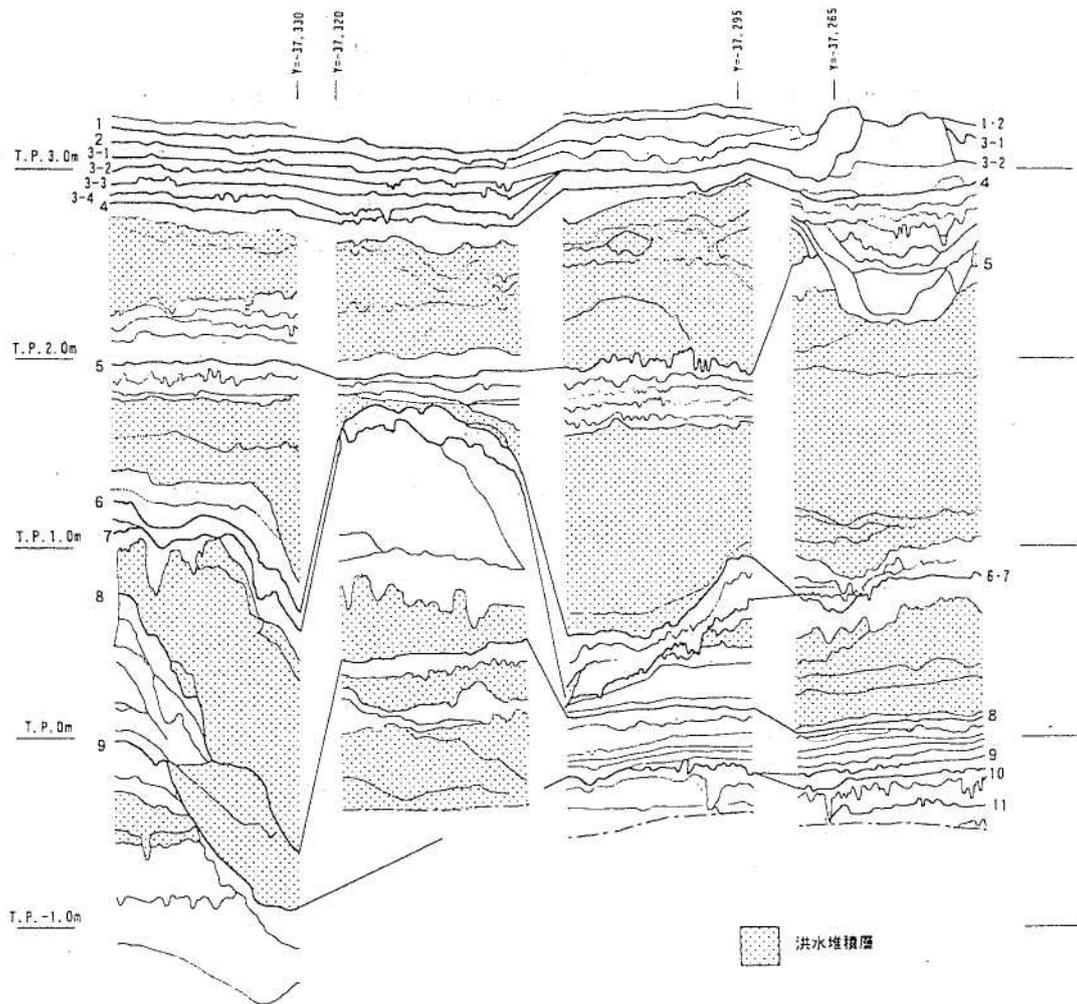


図 3 基本層序 (縮尺は縦 S=1/40×横 S=1/160)

第10層は強く黒色を呈するシルト質粘土層。池島・福万寺遺跡の第4黒色粘土層に対応すると考えられる。一部では第11層との間に10b層の青灰色シルト質粘土層が見られる。

第11層は非常に強く黒色を呈するシルト質粘土。池島・福万寺遺跡第5黒色粘土層や長原遺跡9C層にそれぞれ対応すると考えられる。部分的に第11層の母材となる青灰色シルト質粘土の第11b層が見られる。

検出遺構

第1面 調査区全域で、島島及び水田畦畔・鋤溝等、耕作に関する遺構が検出された。東半で南北方向の島島が2基、西半で東西方向の島島が4基、東西方向の畦畔が1条検出された他、上面から掘削された土坑・溝も検出された。地割は東半が南北方向であるのに対し、西半が東西方向である。中央部分に坪境等、地割を規制する構築物があった可能性も考えられるが、同箇所は旧府営住宅に伴うガス管の本管が敷設されていたと推定され、遺構の検出は不可能であった。なお、地割は条里制施工後の各面に基本的に共通である。第1層じたいの残存が極めて悪いうえ、遺物の出土がほとんどなく明確な時期は不明であるが、近世の可能性が考えられる。

第2面 第1面同様、島島及び水田畦畔・鋤溝等、耕作に関する遺構が検出された。島島、畦畔とも第1面とほぼ同じ箇所で見出されており、景観に大きな変化は見られない。遺物のほとんどが下層からの巻き上がりであり明確な時期は不明であるが、陶磁器が見られることから、近世の可能性が考えられる。

第3-1面(図4上 写真1・2) 島島及び水田畦畔、上層から掘削された土坑・鋤溝等が検出された。島島はいずれも第2面より規模が小さく、結果として上面よりも明瞭に畦畔が検出された。これは、第3-1面から第2面の間に供給された堆積物により、第3面の水田面や畦畔を覆うように第2面の島島が築かれていた為である。なお、東半で検出された南北方向畦畔は、一部に島島が存在はするものの、基本的に約11m間隔で見られるが、西側で検出された畦畔は間隔が約8mと、東半よりもやや狭い。遺物の出土が少なく時期比定が難しいが中世～近世の遺構面と考えられる。

第3-2面 第3-1面に踏襲される島島及び水田畦畔、溝等が検出された。調査区西半では第3-1層を埋土とする下面遺構が検出された。出土遺物は下層からの巻き上がりが多く、須恵器・土師器などが多いが13世紀頃の瓦器碗が出土している。

第3-3面 調査区西半のみで検出された。島島・溝・ピット等が検出されている。溝・ピットなどは第3-2層を埋土とする下面遺構である。地割は上面同様に東西方向である。出土遺物がほとんどなく時期比定は難しいが中世の遺構面であろう。

第3-4面 第3-3面同様、調査区西半でのみ検出された。大型方形土坑5基・溝・鋤溝等を検出している。大型方形土坑は実際には第3-3層中から掘りこまれたものであるが、埋土は掘り上げた土と砂がブロック状に混じり、あまり時期を経ずに埋め戻した状況である。土取り土坑の可能性が考えられる。溝は、第3-3層を埋土とする下面遺構であるが、これまでの各面の検出遺構と違い東北方向～南西方向にやや斜行している。出土遺物はほとんどなく時期比定は困難であるが、中世と考えられる。

第4面(図4中) 土坑・溝・ピット等が検出された。遺構は東半に集中する。溝は条里制に伴うもので、東西方向・南北方向に比較的等間隔に掘削されているものが多い。とくに、上面で島島が検出された部分の直下でとくに良好に検出された。溝は、当初幅20cm程の南北方向溝があまり等間隔ではなく

掘削された後、等間隔の東西方向溝、最後にやや幅広の南北方向溝が掘削されるようである。また、一部の溝の底部には工具痕が見られるものもあり、畑作に伴う耕作痕を含む溝群であると考えられる。さらに、これらよりも新しい段階の遺構として、東半 Y=-37.270 ライン部分にある土坑があげられる。土坑の埋土はブロックを多く含み、土取り用の土坑であると考えられる。

第4 b 面 (図4下 写真3) 東半で下面遺構の土坑・溝・ピットが検出された。溝は上面同様東西・南北方向を志向する。溝があまり検出されなかった東半西部では、掘立て柱建物(2間×3間?)が1棟検出され、柱穴の一部では礎板と思われる板材や柱材の残存も見られた。同部分は、掘立て柱建物築造前後に土坑が掘削されており、建物の存続時期はさほど長くなかったと考えられる。調査区東端の井戸は、1段の曲げ物によるものであり、その曲げ物を第4 b 層の砂層中にわずかにめり込ませている。また、井戸埋土中の曲げ物直上からは底部外面に「村主」と記された平安時代前期頃の墨書土器が出土しており、第4面が機能していたある段階として平安時代前期の時期を与えることができる(写真13)。

第5-0面 調査区西端でのみ検出された。第4層から第5層間に見られる洪水堆積物中の若干安定した一時期に形成された土壌化層上面である。溝1条を検出した。上層の洪水堆積物層中から古墳時代後期の須恵器が出土している。なお、土壌化層を除去した第5-0 b 面では遺構は検出されなかった。

第5面 (図5上 写真4) 東半東側は第5 b 層の堆積が厚く、微高地上であり、T.P.2.5m~2.6mを測る。この部分で盛土による高まり・溝が検出され、畦畔の検出はなかったものの、水田域と推定される。この微高地から西へは、急激に30~40cmほど下がり、その後西に向かい緩やかに下がる。その低まり部分、調査区西半の一部では第5層が3層(①~③)に細分され、第5層②上面では畦畔状の砂の盛り上がりが見られた。ただし、第5層②を構成する層は極粗砂層で、上面からの影響を受けた程度の土壌化でしかなく、層じたいの攪拌もあまり見られないことから、第5層②上面検出畦畔は擬似畦畔Bであると考えられる。

第5 b 面 (図5中 写真5) 調査区東端では、第5 b 層が分厚く堆積しており、この微高地部分では地形に沿う溝(北北東-南南西が主、東北東-西南西は少数)・土坑・ピットが密に検出された。東端中央北側では、竪穴住居と考えられるピット群が1棟検出されたが、炉や壁などは全く見られなかった。溝は幅1.0m前後、深さ0.4m前後のものが多く、やや場所を異にしながらかつ複数回掘削されている。その中で、形状が容易に推定できる程度の大きさの遺物片がややまとまって出土した溝は1条のみであるが、各溝の併存については、切り合いからは少なくとも3時期が考えられる。また、東端の土坑(井戸?)底部からは布留式新相の布留式甕が2個体出土した(写真15)ので、この面の時期の一点として、古墳時代前期末の時期を与えることができる。

一方、この微高地から西側では複数の浅い溝が検出された。このうち調査区東半で検出された溝は、地形に沿うものと直交するものの二者があり、地形に直行する溝は調査区内で最も低い場所に掘削された、調査区西半東側の溝(幅2~4m、深さ約0.5m)に接続する。いずれも、排水用に掘削された溝であると考えられる。調査区西半は、前述の溝部分から西に向かった徐々に高くなってゆくが、複数の浅い溝が散在しているのみである。

こうしたことから考えて、調査区東端に居住域が広がりその西側が調査区中央部に排水施設を持つ生産域と考えられるようである。

第6面 (図5下 写真6) 調査区東半中央と西半中央で人為的な盛土による高まりが検出されたほか、水田畦畔、溝、土坑、落ち込み等が検出された。東半の高まりは、当初の断面の誤認により上部を掘り

すぎているが、再検討の結果、第5面段階に上部が削平されていることが分かった。また、高まり中に複数の土壌化層を挟む。この高まりの東側には第5面の微高地を形成する要因となった洪水堆積層が見られ、高まりの東肩も削平を受けているが、もともと低まっていたとおもわれる。さらに、東側では大畦畔および畦畔が検出され、水田域が調査区外東側にさらに広がっていたものと考えられる。また、東半南西隅に微妙な高まりが見られ、この東側の微高地間にも水田域が見られる。一方、調査区西半の高まりは、第5b面検出段階から最上部が露出しており、東半の高まり同様最上部は第5面段階に削平されている。この高まりの西側には溝（幅4.0～5.0m、深さ約1.0m）がみられる。調査区西端には前述の溝に接続すると考えられる溝が3条検出された。これら以外に遺構は検出されていないが、西端部の溝肩部から弥生時代中期の土器片が密集して出土した。なお、調査区中央部は東西両側に比べてかなり低く、北側へ傾斜している。水田域からの排水先になっていたのであろう。全体的な遺物の詳細が現在のところ不明なため断定できないが弥生時代中期に属するものと考えられる。

第6b面 わずかに溝が検出された程度であるが、調査区東側や同南東隅の高まりがももとの自然地形の高まりを利用し、築かれていたことが分かった。なお、調査区西端部は第6層を除去すると直接第7面が検出されたため第6b面は検出していない。

第7面（図6上 写真7・8） 調査区東半では、水田畦畔が痕跡として検出された。なお、東端の一部は第6面と同一面である。当面廃絶後の洪水により面は大きく削平されていたが、大畦畔は洪水による攪乱部分の東と西で一連のものであったと考えられる。調査区西半は第6面同様の景観が広がっている。西半の高まりは第7面段階に盛土をして造成されたもので盛土下部には第7層土壌化層がみられた。調査区中央部は、第7面を覆う洪水堆積物によって挟られている。調査区西半の高まり盛土及びこの部分以西の第7層中からは多量の弥生時代中期の前半の土器・石器・石材などが出土している。

第7b面（図6中 写真9） 調査区東半では土坑や溝が検出された程度であるが、調査区西半では、特に西側で遺構が密に検出された。調査区東半の溝は、耕作に伴うものと考えられる。遺構からの遺物の出土はほとんどないが、一つの土坑からは弥生時代中期前半（第Ⅱ様式）頃の壺が2個体出土した。内一個体には縦方向の波状文が見られる珍しい例である。調査区西半では、第7面の高まり部分以西のやや高くなった部分から掘立柱建物・溝・土坑・ピットなどが多数検出された。掘立柱建物はピットがほぼ南北軸に平行に検出されたもので、規模は確認出来る限り3×4m程度である（写真16）。高まり東側に位置する大型の土坑からは、赤彩のあるⅡ様式の壺片・石材（サヌカイト）などとともに竪杵の柄かと思われる木製品・イノシシの下顎骨などが出土している（写真17・18）。

第8面（写真6下 写真10） 調査区東半は基本層序に記述したようにラミナが見られる自然堆積層であったことから調査区西半のみ調査を行った。地形的には西ほど高く東に向かって徐々に低くなっている。調査区西端部で調査区を南北に通る大型の溝（幅5.0～6.0m、深さ1.0m程度）が検出された。また、南西から北東に向かい前述の溝に合流する溝（幅2.0、深さ0.3m）も検出された。溝底のレベルをからみてこの溝から大型の溝方向に水を流したものと考えられる。

第8b面（図7上 写真11） 調査区西半のみ調査を行った。溝2条・土坑1基・ピット4基が検出されたのみである。

第9面（図7中 写真12） 調査区東半東側のやや高まった平坦部分でのみ水田畦畔が検出された。なお、畦畔検出箇所以西、以東には平坦な部分が見られず、水田を築くには不向きであったと考えられるが、本来の水田域は若干広がった可能性が考えられる。水田検出部分から地形は徐々に低くなり、

調査区西半の中央部分には大きな南北方向の落ち込みが検出されている。この部分は安全上の問題から部分的な深掘を行って確認を行ったのみである。面の時期は、遺物の出土がなく不確定ではあるが、弥生時代中期前半（第Ⅱ様式）以前であり、前期に遡る可能性も考えられる。ただし、遺物を概観した限りでは上層出土遺物中にも明らかに前期とわかる資料は見られない。

第10面 検出遺構、出土遺物ともなかった。人為的な遺構ではないが、自然地形の落ち込みが確認できた程度である。層の具合から縄文時代晩期と考えられ、池島・福万寺遺跡の第4黒色粘土層に対応すると思われる。

第10b面 検出遺構、出土遺物ともなかった。

第11面 検出遺構、出土遺物ともなかった。層の具合から縄文時代後期と考えられ、池島・福万寺遺跡の第5黒色粘土層や長原遺跡の9c層に対応すると推定される。

まとめ

以上の、調査成果をおおまかにまとめておく。まず、縄文時代後期～晩期（第11・10面）にかけては顕著な遺構は検出されず、遺物の出土も皆無であったが、やや低まった部分では動物の足跡が確認された。人間の活動痕跡は見つからなかったが、動物が低まった部分の水を求めて時折当地にやってきたのであろう。

人間の活動痕跡が顕著に見られるのは弥生時代に入ってからである。弥生時代前期の可能性のある第9面では水田畦畔が検出されたが、地形に大きく規制され、大規模な水田を経営するには至っていない。弥生時代中期段階は複数の遺構面が確認されており、当地での活動が活発化するはこの時期以降である。第8面は西半で若干の遺構が確認されたが、さほど顕著ではない。第7面になると、西半の微高地上に居住域が、東半の低まり部分には水田域が築かれる。第6・7面には大規模な盛土遺構が見られ、大規模開発が行われたようである。各遺構面の細かい時期は遺物の検討を経ていないため不明であるが、概観した限りでは前期や後期の遺物がほとんど見られないため、当調査区における弥生時代の活動の中心は中期、それも前半に顕著であるといえる。

これ以後の様相はしばらく不明であり、次に活動痕跡が見られるのは古墳時代前期末である（第5b面）。この段階までには地形の逆転が起きており、調査区東側で微高地が形成される。そして、この微高地上には当概期の居住域が形成されるが、最終的には生産域となったものと考えられる（第5面）。しかしながら、当調査区では須恵器がほとんど見られず、中期以降の古墳時代の様相は部分的に調査を行った第5～0面以外は不明である。

さらに次の活動痕跡が見られるのは古代になる（第4面）。古代の全ての段階ではないが、単発的な掘立柱建物1棟や、墨書土器が出土した井戸が検出されており、ある段階には居住域であった可能性が考えられる。しかし、この段階を含む以降は基本的に生産域になっていたと考えられ、中世以降の各遺構面（第3・2面）では島島の発展状況が確認された。第1層～3層までは、層中に比較的粗粒の堆積物を含むことが多い。これは、各旧地表面が機能している際に粗粒の堆積物が供給され、それが機能時に攪拌された結果であると考えられる。また、同様な堆積物が混じることから、その供給源に対し類似した環境下にあったと考えられる。

ただし、中世以降の各層では遺物の出土が少なく、詳細な検討も経ていないので、遺構面の正確な時期は現在のところ不明であり、流動的である。

当調査区は縄文時代までは面の更新が顕著でないものの、弥生時代以降には面の更新が顕著になり、分厚い洪水堆積層が見られた。この分厚い洪水堆積層は古代以前で顕著であり、河川などからの洪水を受けやすい土地であったと思われる。その中で、上述のとおり、地形の逆転が起き、居住域や生産域もそれに伴い移動する。その移動については当調査区のみで完結するはずはないので、今後は各欠落した時期に人々がどのように移動し、活動していたのかを今後の調査区や周辺遺跡をも視野に入れて考えていく必要がある。また、同時期の居住域や生産域の広がりについても周辺調査区での今後の成果から新上小阪遺跡における各時代の動向が明らかになることを望みたい。

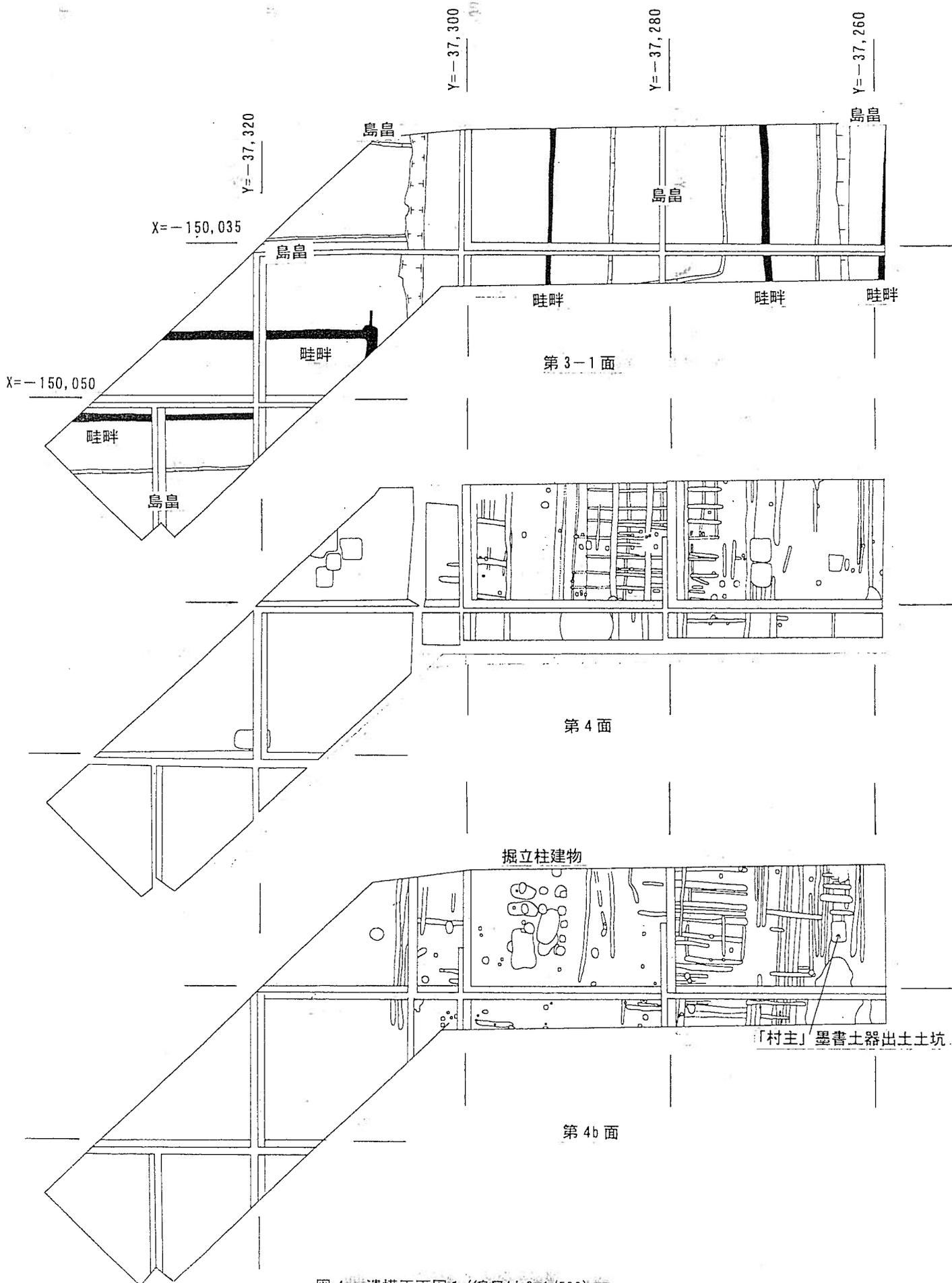


图4 遺構平面図1 (縮尺はS=1/500)

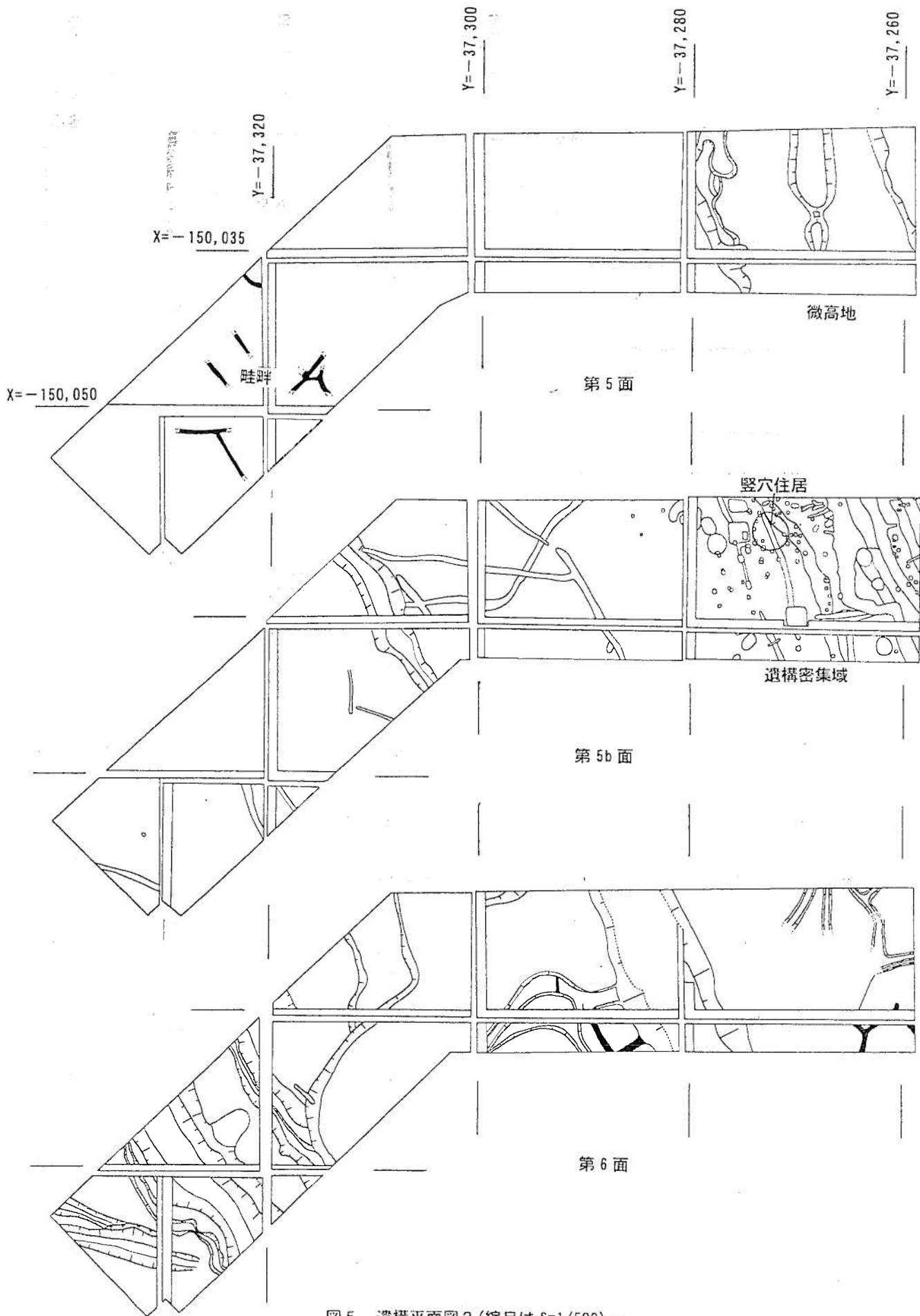


図5 遺構平面図2 (縮尺は S=1/500) --

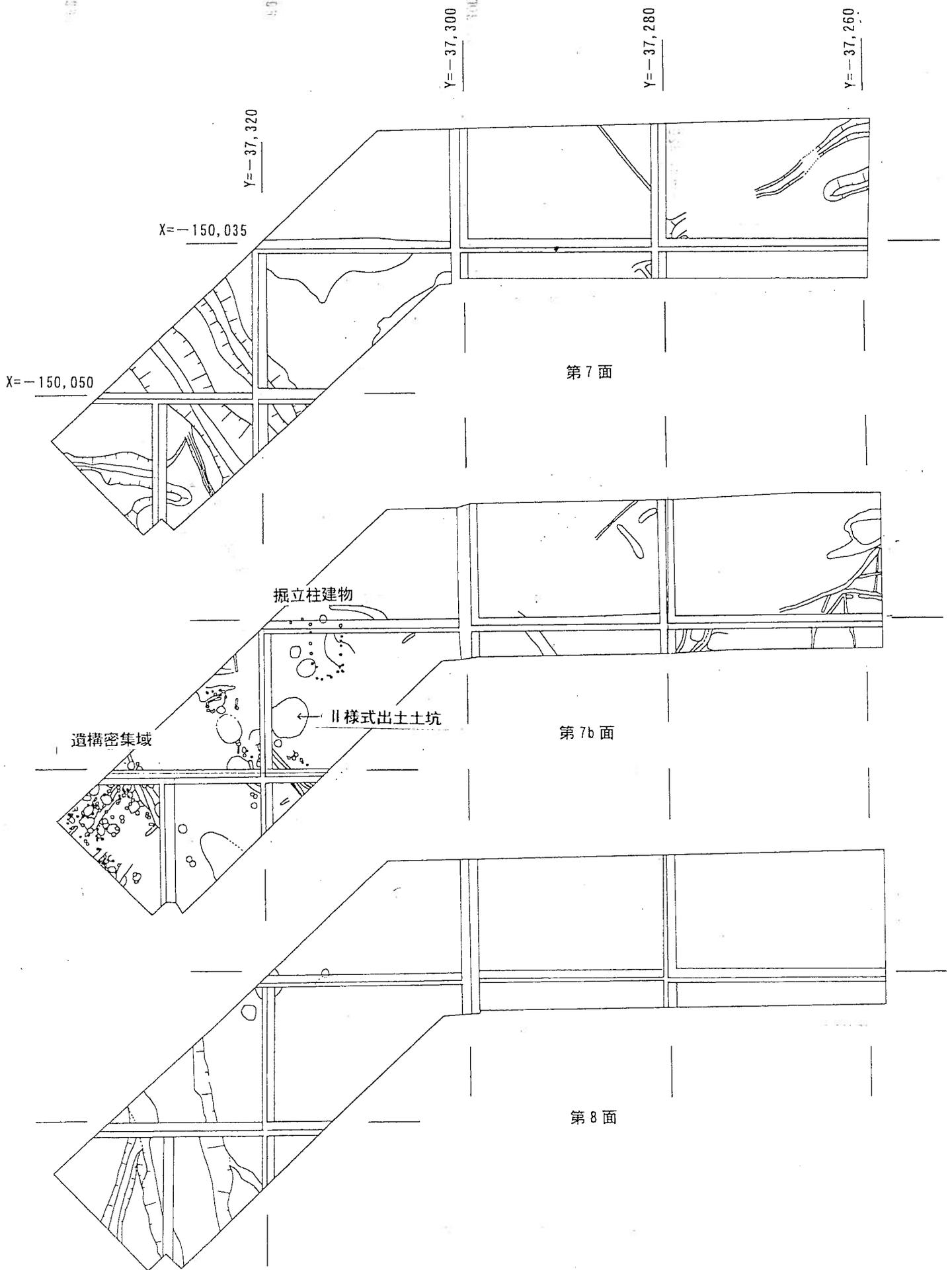


図6 遺構平面図3 (縮尺は S=1/500)

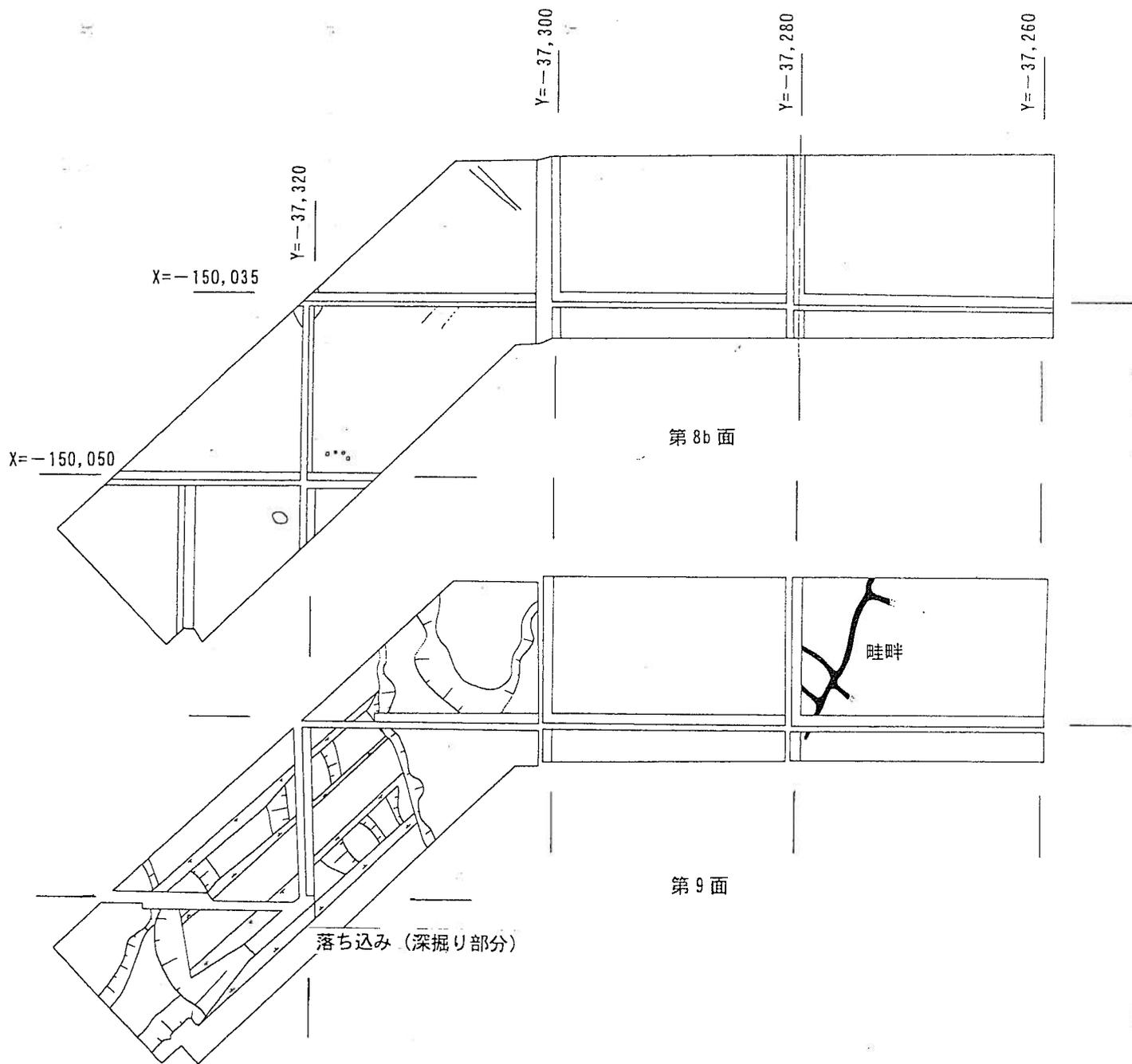


図7 遺構平面図4 (縮尺は S=1/500)